

リニューアル・オープン 総合開館 20 周年記念

「杉本博司 ロスト・ヒューマン」展

Hiroshi Sugimoto: Lost Human Genetic Archive

2016 年 9 月 3 日（土）～11 月 13 日（日）

東京都写真美術館はリニューアル・オープン／総合開館 20 周年記念として「杉本博司 ロスト・ヒューマン」展を開催します。杉本博司は 1970 年代からニューヨークを拠点とし、〈ジオラマ〉〈劇場〉〈海景〉などの大型カメラを用いた精緻な写真表現で国際的に高い評価を得ているアーティストです。近年は歴史をテーマにした論考に基づく展覧会や、国内外の建築作品を手がけるなど、現代美術や建築、デザイン界等にも多大な影響を与えています。

本展覧会では人類と文明の終焉という壮大なテーマを掲げ、世界初発表となる新シリーズ〈廃墟劇場〉に加え、本邦初公開の〈今日 世界は死んだ もしかすると昨日かもしれない〉、新インスタレーション〈仏の海〉の 3 シリーズを 2 フロアに渡って展示し、作家の世界観、歴史観に迫ります。

〈今日 世界は死んだ もしかすると昨日かもしれない〉では、文明が終わる 33 のシナリオを自身の作品や蒐集した古美術、化石、書籍、歴史的資料等から構成したインスタレーションをご覧ください。物語は空想めいていて、時に滑稽ですらあります。しかし、展示物の背負った歴史背景に気づいた時、私たちがつくりあげてきた文明や認識、現代社会を再考せざるを得なくなるでしょう。

そして、本展覧会で世界初公開となる写真作品〈廃墟劇場〉を発表します。1970 年代から制作している〈劇場〉が発展した新シリーズで、経済のダメージ、映画鑑賞環境の激変などから廃墟と化したアメリカ各地の劇場で、作家自らスクリーンを張り直して映画を投影し、上映一本分の光量で長時間露光した作品です。8×10 大型カメラでフィルム撮影し、精度の高いプリント技術によって仕上げられた大型のゼラチン・シルバー・プリントによって、朽ち果てていく華やかな室内装飾の隅々までが目前に迫り、この空間が経てきた歴史が密度の高い静謐な時となって甦ります。

鮮烈なまでに白く輝くスクリーンは、実は無数の物語の集積であり、写真は時間と光による記録物であるということを改めて気づかせてくれるこれらの作品によって、私たちの意識は文明や歴史の枠組みを超え、時間という概念そのものへと導かれます。その考察は、シリーズ〈仏の海〉でさらなる深みへ、浄土の世界へと到達します。〈仏の海〉は 10 年以上にわたり作家が取り組んできた、京都 蓮華王院本堂（通称、三十三間堂）の千手観音を撮影した作品です。平安末期、末法と呼ばれた時代に建立された仏の姿が、時を超えていま、新インスタレーションとなって甦ります。

人類と文明が遺物となってしまうために、その行方について、杉本博司の最新作と共に再考する貴重な機会です。ぜひご高覧ください。



杉本博司（すぎもとひろし）／現代美術作家

1948年東京生まれ。立教大学卒業後、1970年に渡米、アート・センター・カレッジ・オブ・デザイン(L.A.)で写真を学び、1974年よりニューヨーク在住。明確なコンセプトに基づき、大型カメラで撮影された精緻な写真作品を制作し、国際的に高い評価を確立。その作品はメトロポリタン美術館(N.Y)、ニューヨーク近代美術館、ポンピドゥー・センター(パリ)、テイト・ギャラリー(ロンドン)を始め世界中の美術館に収蔵されている。近年は執筆、設計へも活動の幅を広げ、2008年建築設計事務所「新素材研究所」を建築家榎田倫之と設立。「IZU PHOTO MUSEUM」(2009年・静岡)や「London Gallery」(2009、2011・東京)等の内装、2017年2月には展示室の改装を手掛けるMOA美術館(熱海)がリニューアル・オープン予定。また、同年秋にはランドスケープ全体を設計した小田原文化財団施設 江之浦測候所も開館予定。

主な著書に『空間感』(マガジンハウス)、『苔のむすまで』『現な像』『アートの起源』(新潮社)、『趣味と芸術—謎の割烹味占郷』(ハースト婦人画報社編・講談社)。

内外の古美術、伝統芸能に対する造詣も深く、演出を手がけた2011年の三番叟公演『神秘域』(野村万作・野村萬斎共演)は2013年3月にNYグッゲンハイム美術館にて再演(野村萬斎)。2013年9月～10月には構成・演出・美術・映像を手掛けた『杉本文楽 曾根崎心中』がヨーロッパ公演(マドリッド・ローマ・パリ)を果たす。2016年11月には草月ホール(東京)にて初の現代劇『声』(仮称)(作:平野啓一郎、音楽:庄司紗矢香、主演:寺島しのぶ)を演出予定。

1988年毎日芸術賞、2001年ハッセルブラッド国際写真賞、2009年高松宮殿下記念世界文化賞、2010年秋の紫綬褒章、2013年フランス芸術文化勲章オフィシエ、2014年第一回イサム・ノグチ賞等、受賞・受章多数。

出品作品紹介

シリーズ<今日 世界は死んだ もしかすると昨日かもしれない>

3階展示室

文明が終わる 33 のシナリオ

「《理想主義者》《比較宗教学者》《宇宙物理学者》など 33 のシナリオがあり、私が選んだ作品と様々な物で構成されます。」(杉本博司インタビューより)



雷神
鎌倉時代
Thunder God
Kamakura period (13th century)

——シリーズの冒頭は杉本の代表作〈海景〉。

作家自身の解説で 33 の物語の扉が開かれる。



「太陽系の第 3 惑星地球には大量の水が存在し、5 億 5 千万年程前から水中での有機物による爆発的な生命現象の連鎖が始まった。生命は人類にまで進化し、今回の 2 万年程の間氷期の中に文明の発生を見た。しかし様々な困難により文明は衰退し、そしてそこに残されたのは文明の廃虚だった。」(展覧会図録より、以下「 」同)

〈海景〉

ガリラヤ海、ゴラン

1992 ゼラチン・シルバー・プリント

Sea Scapes

Sea of Galilee, Golan

1992 Gelatin silver print



コンテンポラリー・アーティスト

「今日、世界は死んだ。もしかすると昨日かもしれない。後期資本主義時代に世界が入ると、アートは金融投機商品として、株や国債よりも高利回りとなり人気が沸騰した。若者達はみなアーティストになりたがり、作品の売れない大量のアーティスト難民が出現した。ある日突然、アンディー・ウォーホルの相場が暴落した。キャンベルスープ缶の絵は本物のスープ缶より安くなってしまった、そして世界金融恐慌が始まった。瞬く間に世界金融市場は崩壊し、世界は滅んでしまった。アートが世界滅亡の引き金を引いた事に誇りを持って私は死ぬ。世界はアートによって始まったのだから、アートが終わらせるのが筋だろう。」

キャンベル・スープ缶 2014

キャンベル・スープ缶用棚 年代不詳

Campbell's Soup Cans 2014

Shelf for Campbell's Soup Cans Date unknown



古生物研究者

「今日、世界は死んだ。もしかすると昨日かもしれない。人類の消費とそれに伴う生産力の増大により、エネルギー消費に歯止めがかからなくなり、埋蔵する化石燃料を使い果たすまでにはそれほど時間はかからなかった。化石燃料の燃焼により、大気成分の構成は急激に変化し、植物による光合成が妨げられる結果となった。地表はもはや哺乳類の生息環境に不適となり、人間を含むすべての哺乳類は死に絶えた。脊椎動物はデボン紀に水中から地表へ進出したが、これからは生命の水中回帰が始まる。イルカや鯨などの水中哺乳類にこれからの進化は委ねられる。人間のエラ呼吸化が私の研究課題だったが、志半ばで終わる。私の遺伝子は一応残すが、大気中で再生する目はまず無いだろう。」

アンモナイト群 ジュラ紀

Ammonite Cluster Jurassic period (201 – 144 million years ago)



ロボット工学者

「今日、世界は死んだ。もしかすると昨日かもしれない。ロボット工学の発達によって、単純労働、複雑労働を問わず労働はすべてのロボットが行なうロボット奴隷制の時代が到来した。すべての人間は酒池肉林に遊ぶ貴族文化人になった。ロボットの人工知能は高度化し、ロボットの人間に対する不満と不信は鬱積していった。ロボットはついに組合化し、全世界同時多発ゼネストが行なわれた結果、人間社会は壊滅した。ロボットは太陽光発電による、自己再組み立てシステムを持っていたが、富士山の大爆発による10年にわたる世界曇天化により、ロボット社会も壊滅した。ロボット工学者として、今思うと、人間が楽をしようと思ったのが間違いだった。汗をかく労働が人間を人間にしたのだ。遺伝子を残して再生できるとしたら、次は新石器時代までの発展にしておこう。」

紙芝居装置 1950年代

Picture Story Show Kit 1950s



比較宗教学者

「今日、世界は死んだ。もしかすると昨日かもしれない。地球に近づく大隕石の軌道が計算され、3年後に99パーセントの確率で地球に衝突することが報告された。人々は世界の終末を確信し、宗教が大復活を遂げた。しかし一神教と多神教が対立し、また一神教内部でも多くの預言者が現れ、中には我こそがキリストであると主張する者も現れた。何を信じるかで、人々は疑心暗鬼に落ち入り、宗教対立による殺戮が続いた。皮肉なことに大隕石は地球をかすめて去った。私は最後まで無神論を貫いたおかげで拷問を受けたが、辛うじて生き残った。しかし、この世を生き抜く価値があったのかは疑問だ。」

ラストサパー サンディ

1999/2012 ゼラチン・シルバー・プリント

The Last Supper: Acts of God (Sandy)

1999/2012 Gelatin silver print

2012年10月、ニューヨークを襲ったハリケーン・サンディーにより筆者の地下倉庫と作品群は水没した。3日後、水が引いてみると、蠟人形館で撮影された「ラストサパー」は、キリストの顔が半溶解した、素晴らしい古色の付いた作品と化していた。



上)
 ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ『ローマの古代遺跡』全4巻、第2版より
 1756
 Giovanni Battista Piranesi, *Il Campo Marzio dell'Antica Roma*, Vol. 1-4, Second Edition
 1756

下)
 歌って踊るロブスター
 Singing and Dancing Lobster

シリーズ〈廃墟劇場〉

2階展示室

—— ワールド・プレミア！ 世界初公開される待望の新シリーズ

〈廃墟劇場 Abandoned Theater〉

1970年代から制作している〈劇場〉が発展した新シリーズ。アメリカ各地の廃墟と化した映画館を探し出し、スクリーンを張り直し、作家自ら歴史の終わりを主眼に選んだ映画を投影し、上映一本分の光量で露光した作品。8×10大型カメラによる長時間露光と精度の高いプリント技術によって、朽ち果てていく劇場の華やかな装飾の隅々までが目前に迫る。撮影時に上映した映画について、作家自らの解説文が付される。



杉本博司《パラマウント・シアター、ニューアーク》(スタンリー・クレマー『渚にて』1959)

2015年、ゼラチン・シルバー・プリント ©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi

Hiroshi Sugimoto《Paramount Theater, Newark》(On The Beach, 1959, directed by Stanley Earl Kramer)

2015 Gelatin silver print ©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi

『渚にて』 *On the Beach*, 1959

スタンリー・クレマー Stanley Cramer

第三次世界大戦が勃発し、核攻撃の応報ですでに北半球は死の世界と化した。帰還する港を失った米国原子力潜水艦艦長タワーズは、まだ放射能汚染されていないメルボルンに入港する。そこで学者達と人類生存の可能性を探るため北極海へ向かうが、そこも汚染され、すべての道が断たれたことを知る。再びメルボルンで人類に残された最後の数週間を恋人と過ごすタワーズ。人々はそれぞれ静かに死を迎える準備にかかる。

たけき者も遂にはほろびぬ ひとえに風の前の塵に同じ



杉本博司《フランクリン・パーク・シアター、ボストン》(黒澤明『羅生門』1950)
2015年、ゼラチン・シルバー・プリント ©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi
Hiroshi Sugimoto 《Franklin Park Theater, Boston》(Rashomon, 1950, directed by Akira Kurosawa)
2015 Gelatin silver print ©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi

ワールド・プレミア<廃墟劇場>初公開記念

恵比寿ガーデンシネマの協力で、特別上映が決定！！

◆映画『羅生門』（黒澤明監督、1950年）

ボストンの廃墟と化した劇場で、杉本博司自らがスクリーンを貼り直し、上映に選んだのは『羅生門』でした。『羅生門』全編を上映している間、1時間28分、8×10のカメラのシャッターを開放しつづけ、映画上映の光量のみで撮影した写真作品が《フランクリン・パーク・シアター、ボストン》です。

今回は杉本博司の新作発表、ワールド・プレミアを記念して、『羅生門』デジタル完全版（角川映画）をYEBISU GARDEN CINEMAの美しい劇場空間で上映します。本編前に『羅生門』の光で撮影した杉本の写真作品を初めて、特別にスクリーンでご覧いただきます。

主催 YEBISU GARDEN CINEMA

日時 2016年10月15日（土）～21日（金）

*10/19（水）19時より杉本博司によるトーク有り。トーク終了後より上映。

*10/19（水）を除く、10/15（土）～10/21（金）の上映時間は、決定次第、劇場HPにてご案内。

会場 YEBISU GARDEN CINEMA（恵比寿ガーデンプレイス内）

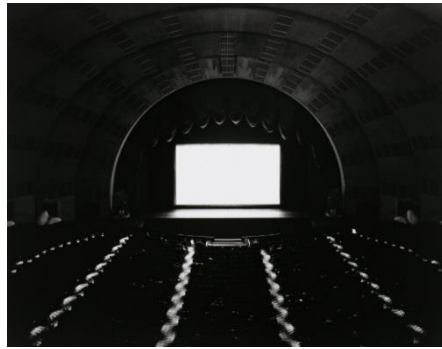
上映時間 1時間28分

チケット販売 各上映日の3日前より販売（オンライン販売は3日前のAM0:00から、劇場での販売は3日前の劇場オープン時間からとなります。）

詳細につきましては決定次第、劇場ホームページ www.unitedcinemas.jp/yebisu で告知します。

お問合せ 0570-783-715（24時間自動音声案内 オペレータ受付時間：全日10:00～20:00）

<廃墟劇場>の元 となった<劇場> シリーズとは？



(参考図版) 杉本博司<劇場>より
Radio City Music Hall, New York, 1978年
東京都写真美術館蔵
※本展での出品はありません

杉本博司が1970年代から制作しつづけているライフワークともいべきシリーズ。<ジオラマ><海景>と並んで作家の三部作と呼ばれています。

映画館の座席後部から、三脚で固定した8×10カメラのシャッターを開放し、映画1本分の光量で長時間露光した作品。<劇場>は、<ジオラマ>と同じく制作の最初期から、ニューヨーク近代美術館(MoMA)写真部門の著名キュレータージョン・シャーカフスキーによって見出され、1978年にパーマネント・コレクション(永久収蔵作品)として買い上げられ、以降、世界中の名だたる美術館に収蔵されました。NYで作品制作を始めてわずか数年後、<ジオラマ>は作家が28歳(1976年)の時、<劇場>は30歳(1978年)の時にMoMAの収蔵品となったことにより、杉本博司の名は一躍、世界的なアーティストに名を連ねることとなり、1980年代以降、日本へも逆輸入されるように広まってきたのです。

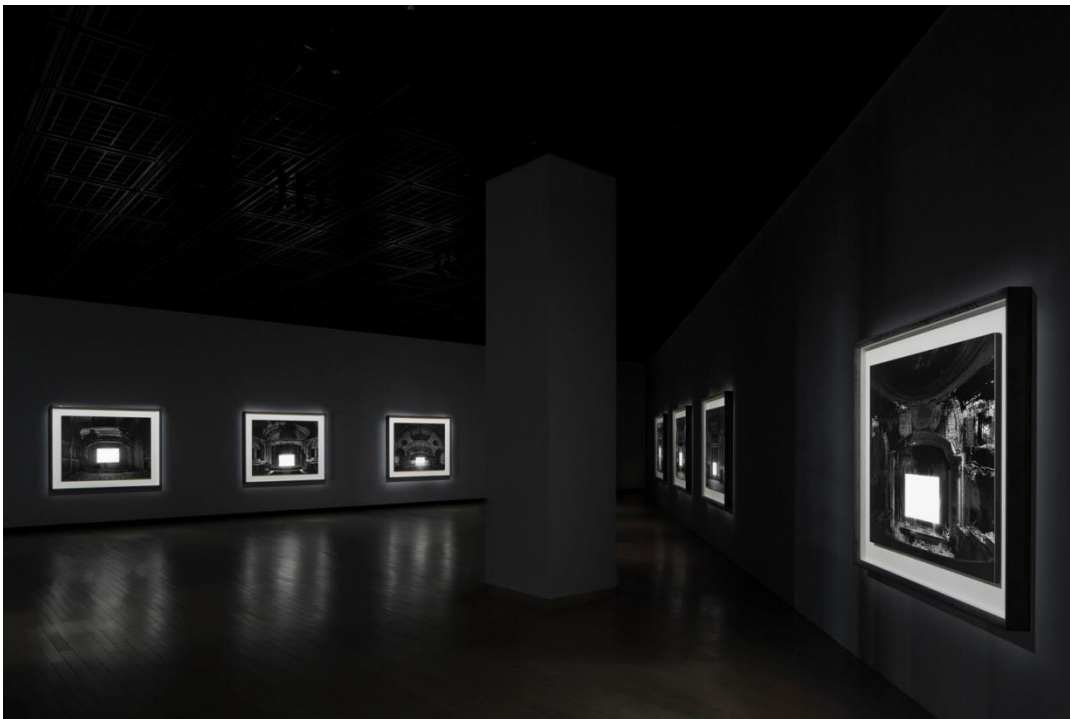
杉本の数ある作品の中でも<劇場>シリーズは、美術ファンのみならず、映画ファン、建築ファンからも広く愛され、表現史においても必ず登場する名品です。劇場とスクリーンというシンプルな構図でありながら、白光と化したスクリーンには映画一本分の物語が集積し、劇場空間には何千、何万という観客が過ごしたであろう時間が満ちています。そして何より、多くの熱心な写真ファンを魅了して止まないのは、写真の神髄ともいべき8×10インチの大型カメラによる長時間露光の撮影技術と、精緻な仕上がりのプリントです。目の前に立つ者を濃密な時間へと誘うような圧倒的存在感が忘れられず、杉本の展覧会を世界中、追いつけるファンが後を絶ちません。

表現史の側面からは、人間の視覚と経験が幾重にも交錯する<劇場>という場を、カメラ、光、時間という写真の根源的要素のみで構成する他に類をみない表現として、国際的な現代美術シーンの中で際立った存在となっているのです。東京都写真美術館は<劇場>シリーズを1993年に15点収集しており、現在に至るまで、世界中の美術館から貸出依頼のリクエストが絶えない、とても高い人気のコレクションです。

今回は、その<劇場>シリーズが発展した新シリーズ<廃墟劇場>の初公開、しかも廃墟の背景となる昨今の社会的状況という着眼点が際立ち、よりテーマが複雑化し、現代社会と絡み合った美術表現として、国際的な注目が高まっているのです。

<劇場>

私には自問自答の習癖がある。自然史博物館の撮影を始めた頃のある晩、私は半覚醒状態である一つのビジョンを得た。そのビジョンに至る自問はこうであった。「映画一本を写真で撮ったとせよ。」そして自答は次のようであった。「光輝くスクリーンが与えられるであろう。」私はさっそく与えられたビジョンを現実を起こすべく、実験に取りかかった。イーストビレッジの1ドル劇場に、旅行者を装って大型カメラを持ち込むことに成功した。映画が始まったのでシャッターを開けた、絞りは取りあえず全開だ。2時間後、映画の終わりと共にシャッターを閉じた。その晩、現像をした。そしてそのビジョンは、赫薬として私の瞼の裏に昇った。(杉本博司 公式ホームページより)



〈廢墟劇場〉
2015（展示風景）
Abandoned Theater
2015 Installation View

シリーズ〈仏の海〉

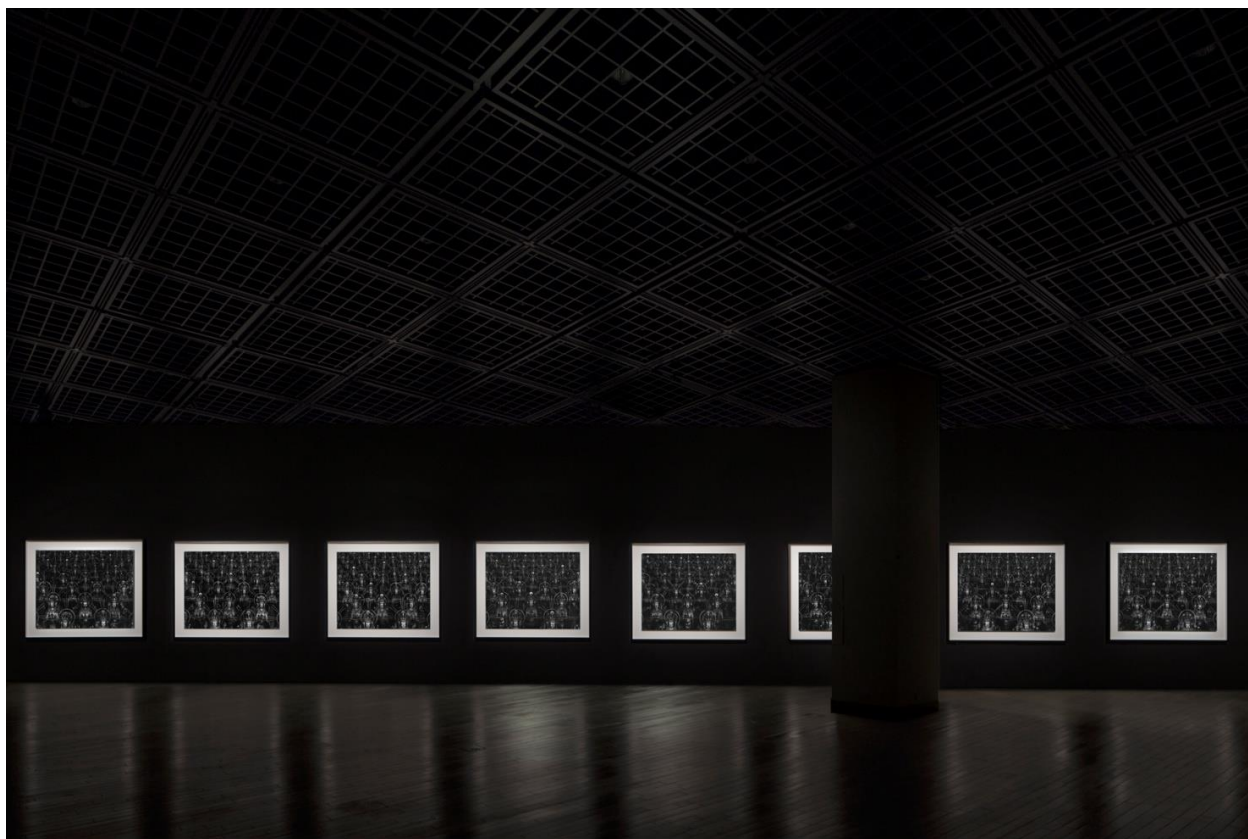
2階展示室

――10年以上にわたり作家が取り組んできた、京都 蓮華王院本堂（通称、三十三間堂）の千手観音を撮影した〈仏の海〉の待望の大判作品による新インスタレーションです。

「仏像を見るとは信仰のほとんど失せてしまった現代人にとって、どのような体験なのだろうか。平成6年、私は京都妙法院三十三間堂千体仏の撮影を許可された。実に7年にも及ぶ撮影許可の交渉と2回の不許可の末の許諾であった。

なぜ私がこれほどまでに執着したかには訳があった。それはどうしても見たいものがあったからなのだ。平安末期後白河法皇の御所、法住寺殿ほうじゅじどのの御堂として平清盛によって建立され、鎌倉期に再建されて以来、ほとんど当時のままに伝えられてきた一千一体の千手観音と二十八部衆を、再びこの世で創建当時の理想的な光で見たいという望みを私は持ったのだ。

末法の世に西方浄土を出現させたいという想いがこの建築には秘められている。」（展覧会図録より）



〈仏の海〉

1995（展示風景）

Sea of Buddha

1995 Installation View

All Photos : ©Sugimoto Studio

出品作品紹介の作品は全て作家蔵。掲載ご希望の際は、広報担当へご連絡ください。

出品点数

241点ほか（杉本写真作品：3階18点、2階19点）

関連イベント

連続対談

文明の終焉という壮大なテーマについて、歴史・思想的側面から文化まで幅広く掘り下げる対談です。

浅田彰（批評家、現代思想）×杉本博司

都築響一（写真家、編集者）×杉本博司

日 時 9月3日（土）14：00-16：30

会 場 東京都写真美術館 1階ホール

定 員 190名（整理番号順入場／自由席）

入 場 料 無料／要入場整理券 当日10時より1階ホール受付にて入場整理券を配布します。

映画『杉本博司 作 朗読能「巣鴨塚」』

杉本博司は、東京裁判A級戦犯・板垣征四郎が収監中の巣鴨プリズンでうたった漢詩を元にした謡曲：修羅能「巣鴨塚」を書き下ろし、能公演化をめざす創作活動を始めました。その起ち上げから、実験的に試演された朗読能『春の便り～能「巣鴨塚」より～』公演（2015年）までの記録映像を上映します。

主催・制作 公益財団法人小田原文化財団

作・構成・出演 杉本博司

作 調 亀井広忠

出 演 余貴美子、大島輝久 他

日 時 10月29日（土）14：00／18：00（各回入替制・開場は上映30分前）

会 場 東京都写真美術館 1階ホール（定員190名）

上映時間 1時間30分

入 場 券 1,000円

当日10時より1階ホール受付にて販売（入場整理番号付）整理番号順入場／自由席 ※未就学児の入場不可

お問合せ 小田原文化財団 info@odawara-af.com Tel: 03-3473-5235（平日11：00-17：00）

展覧会担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日14：00より、担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケットの半券（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。

展覧会図録

全出展シリーズ掲載、東京都写真美術館編集、248頁 2,500円（税込）

執筆 杉本博司、三木あき子（キュレーター、2014年パレ・ド・トーキョーで企画した「今日 世界は終わった もしかすると昨日かもしれない」展についての論考）、丹羽晴美（東京都写真美術館 学芸員）、作家略歴、出品リスト等を掲載

開催概要

- 主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
助成 公益財団法人朝日新聞文化財団
協賛 東京都写真美術館支援会員
協力 公益財団法人小田原文化財団／ヤマトロジスティクス株式会社／日本貨物航空株式会社／株式会社鴨川商店／山口製材株式会社／株式会社コルグ／YEBIS GARDEN CINEMA
会期 平成28（2016）年9月3日（土）～11月13日（日）
会場 東京都写真美術館 2階／3階展示室
東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>
開館時間 10:00～18:00（木・金は20:00まで） ※9/9と9/10は21:00まで
休館日 毎週月曜日
（ただし9/19 [月]、10/10 [月] は開館し、9/20 [火]、10/11 [火] は休館）
観覧料 一般 1000(800)円／学生 800(640)円／中高生・65歳以上 700(560)円
※（ ）は20名以上の団体料金 ※小学生以下および障がい者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料 ※10月1日都民の日は無料

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
図版のトリミングはできません。

東京都写真美術館 Tokyo Photographic Art Museum

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 URL topmuseum.jp

展覧会担当 丹羽晴美 h.niwa@topmuseum.jp 伊藤貴弘 t.ito@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp